

植物防疫講座

病害編-9

イネごま葉枯病の発生生態と防除

山口県農林総合技術センター 農業技術部 ^{すみ}角 ^だ田 ^{よし}佳 ^{のり}則

はじめに

イネごま葉枯病の病原菌は、子のう菌類の *Cochliobolus miyabeanus* (Ito & Kurib.) Drechs. ex Dastur であり、無性世代は、*Bipolaris leersiae* (Breda de Haan) Shoem で、菌名が確定するまでは、*Helminthosporium oryzae* による病害として知られていた (上山ら, 1975)。本病は中山間の砂質土壌や平坦地の沖積土壌、泥炭地等の秋落ち田と呼ばれる圃場で発生が多く、特定地域の病害とされることが多かった。しかし、1960年代に「穂枯れ」の影響による減収や品質低下が明らかになるとともに、同時期に導入された稚苗移植における箱苗の発病が問題になり、重要性が認識されるようになった。最近の調査でも、本病の発生には地域差があり、普通期水稲を対象とした調査では、東北地域や関東地域で少なく、中部地域から西南暖地にかけて多い (表-1)。しかしながら、全国的な発生面積の推移を見ると、近年になって増加傾向が認められ、耕作水田面積が減少する中で、問題となってきている現実がある (図-1)。本病は今後の発生動向に留意すべき病害の一つと考えられる。

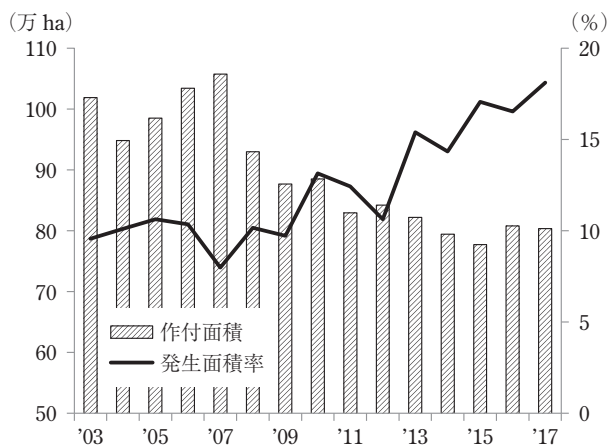


図-1 普通期水稲の作付面積とイネごま葉枯病の発生面積率 (JPP-NET データベースより作成)

I 発生生態

1 育苗期および本田期の症状

イネごま葉枯病は、育苗期の苗、本田期の葉および穂に発生する。箱育苗においては、出芽後の葉鞘の褐変や褐色条斑の形成、葉鞘や葉身における褐色小斑点の形成等として認められる。詳細に観察すると、籾の表面には黒褐色の菌糸のまん延が認められる。本病に侵された苗は、生育が遅延して草丈が低くなり、中には新葉が出すくんで曲がり、奇形を呈すものもある。病勢の激しい苗は立枯れとなる。緑化期以降では、葉身に褐色の楕円形病斑を形成し、そのために葉身のねじれや曲折を生じることがある (図-2)。

本田では、幼穂形成期ごろから下葉の葉身に長さ2~3mm、幅1~2mm程度の褐色の楕円形病斑を生じ、穂ばらみ期を過ぎるころから上位葉に進展する (図-3)。病斑は周囲に黄色の中毒部を伴うが、イネいもち病に見られるような葉脈に沿った壊死線はなく、紡錘形にならないため判別できる (図-4)。拡大した病斑では中央部

表-1 普通期水稲におけるイネごま葉枯病発生圃場の地域別面積と作付面積に占める割合 (5か年平均)

地域	調査年	作付面積 (ha)	発生面積 (ha)	発生面積率 (%)
東北・関東	'03-'07	391,256	3,297	0.8
	'08-'12	299,726	3,250	1.1
	'13-'17	283,028	2,893	1.0
中部	'03-'07	273,057	25,012	9.2
	'08-'12	259,579	83,067	32.0
	'13-'17	253,233	101,858	40.2
近畿・中国・四国	'03-'07	192,392	35,494	18.4
	'08-'12	174,719	28,917	16.6
	'13-'17	172,525	27,547	16.0
九州・沖縄	'03-'07	151,934	19,911	13.1
	'08-'12	138,437	19,082	13.8
	'13-'17	92,091	21,640	23.5

JPP-NET データベースより作成。

Ecology and Control of Rice Brown Spot Caused by *Cochliobolus miyabeanus*. By Yoshinori SUMIDA

(キーワード：イネごま葉枯病，発生生態，防除)